第11回

薬草だより

サフランは日本では婦人病の妙薬、イスラム世界ではラマダン月の楽しみ

樋口 剛央*

生薬名：サフラン
薬用となるサフランの基原植物：
・第十六改正 日本薬局方（2011年）
Crocus sativus Linné（アヤメ科）
薬用部位：柱頭

サフランは地中海沿岸からインドに至る地域が原産のアヤメ科の多年生草本です。日本では花の少ない11月頃に土から10cm位の所に深紅のメシベと黄色のオシベを付けた淡い紫色の清楚な花をつけます。薬用部位は乾燥したメシベ（花柱）先端部の柱頭です。生薬1gを得るには約120～140個の花が必要で、サフランが高価と言われる理由はここにあります。厚生労働大臣が告示した2015年の薬価基準では、1kg当たり35万円にもなります。

日本へ最初にもたらされたのは江戸時代とされ、各地に広まりました。その後サフランを含む婦人病の妙薬である実母散が創られました。

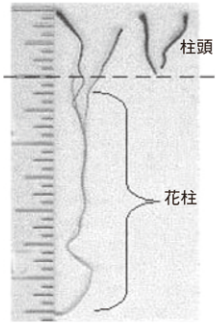
サフランの産地はイラン、スペイン、ギリシャ等世界中にあり、その総収穫量は年間約200トンです。ほとんどは香辛料として食用にされ、他には薬用、染料、香料に使用されます。日本でも生産されていますが、年間で数十kg程度です。最大の生産国はイランで、世界の約90％が生産されています。現在のイランでサフランの栽培が盛んな理由は、もともと原産地であり、世界最初の栽培地のひとつであることも大きいですが、宗教的な習慣にもあるようです。イランの国教でもあるイスラム教徒の多くは、ラマダン月になると日中に断食します。日没後、その日の断食が終わったら、サフランの入ったスープやお菓子等を食す習慣があり、断食時期の国民の楽しみにもなっているようです。それによってサフランが大量に消費されるので、イランが世界最大の栽培地である理由のひとつと考えられます。

もちろんイランだけではなく、世界中のイスラム教徒は毎年ラマダン月になると大量のサフランを消費します。そのため、ラマダン月の前後にはサフランの相場が大きく動きます。サフランは高価であるため、仕入れ担当者は、その年のイランでのサフランの出来栄えを調査し、ラマダン月の前後どちらで契約するかを決めるために、あらゆる情報を解析します。当社は品質の安定したイラン産サフランを主に原料として採用しており、一部用途に応じてスペイン産、日本産を採用しています。なお、日本国内では医薬品原料として、年間約1000kgが使用されています（日本漢方生薬製剤協会調査結果2015年4月より）。

サフランによく似た庭先の園芸植物にクロッカスがあります。クロッカスはサフランと同じアヤメ科*Crocus*属の仲間ですが、花は春咲きで様々な色があり、春サフランや花サフランとも呼ばれ、秋咲きで薄紫色のサフランとは異なります。見た目はよく似ていますが、クロッカスから生薬のサフランは採れません。また、イヌサフラン科（従来の分類法ではユリ科）のイヌサフランもよく似た園芸植物ですが、こちらは有毒植物で中毒を起こすため、食べないよう注意が必要です。サフランとは違い、葉のない時期に花を付けるので見分けることは可能です。

サフラン *C. sativus*　開花期11月

クロッカス *C. vernus*　開花期3月



黄色の花柱は薬用部位ではない

＊松浦薬業株式会社